

# シネマな水の話

水がただではないことを思い知らされたのは30年近く前、初めての海外旅行でスペインに行き、当地の飲食店に入ったときのことだ。日本であれば当たり前にお供される水が出てこないのである。聞けば水は有料、メニューに値段が表示されていて、場合によっては水のほうがワインよりの高いと聞いてさらに驚いたのだ。

その後、江戸の昔から上水道が整備されるまでの間、東京には「水売り」という商売があったことを知り、銀行口座から水道料金が引き落とされていることは承知しているし、最近では冷蔵庫にリットル入りのミネラルウォーターを常備しているにもかかわらず、普段、水を買っているという意識はとも稀薄だ。

映画「ブルー・ゴールド 狙われた水の真実」は、水を湯水のように消費しながらその実際については無頓着な私のような人間に冷や水（どころではないのだが）を浴びせかける。今や「水はただではない」ところか、水を巡って世界各地で戦争が起きているという（ちなみに映画の原題はBLUE GOLD・WORD WATER WARS）。ブルー・ゴールド、すなわち水は「青い黄金」、あからさまに言えば「水

「映画芸術」顧問 内田 眞

## 「ブルー・ゴールド 狙われた水の真実」



1月16日より渋谷アップリンクほか全国にて順次公開

は金なり」なのだ。この作品は当初、水がなくなった地球を舞台にしたSF映画として構想されていたようだ。監督のサム・ホッソがプロデューサーのサイ・トリビノ（彼は「地球に落ちてきた男」(デヴィッド・ボウイ主演)や、本作ではナレーターを務めるマルコム・マクダウ

### 世界中で水戦争が始まっている!

2010年(平成22年)1月4日

エル主演の「時計仕掛けのオレンジ」という傑作を世に送り出した製作者——と企画を練っていた折、資料として渡された『「水」戦争の世紀』(モート・パーロウ、トニー・クラーク著/集英社新書)を読んだことから急ぎよ、ドキュメンタリーとして撮ることにしたという。それほどに今、水を巡る状況は危機的であり、恐るべき事態が起きているのである。

映画は、都市化の進展と人口の増加に伴う水需要の増加が引き金となって世界中で起きている『水戦争』をドキュメントしていく。第二次世界大戦後、途上国の支援を目的に設立された世界銀行が、支援するどころか三大水道企業と手を組み、債務負担の軽減と引き換えに水道の民営化に加担してきたこと。1992年にアイルランドで開かれた国際会議で採択された「水と持続可能な開発に関するダブリン宣言」によって人類の共有財産であるはずの水が「商品」として定義され、水ビジネスが承認、開始されたこと。国連のミレニアム開発目標には企業の利益の源泉となるため、水の汚染や地下水利用の抑制は含まれていないこと。金融業界による海水の淡水化や汚染水の浄化技術への投資、食料生産には不可欠な水の輸出プロジェクトなど、悪辣にして巧妙な戦略のもとに進行する銃や爆弾を用いない『水戦争』の実態がパーロウやクラークたちが識者によって次々に明らかにされる。

同時に、そうした国際機関や国、政治家とも結託した企業に対するNGOや市民運動家による訴訟や抗

議、地道な活動も映し出される。IMFに課せられた負債の免除を条件に、ポリビアの水の供給システムを奪い取ったアメリカの多国籍企業(ヘクテル)に対する抗議行動「コチャバンバ水紛争」を指揮したオスカ・オリベイラが水憲章の採択を国連に迫る運動。アメリカの二高校生だったライアン・ヘリルジャクが始めた募金で井戸を買って開発途上国に寄付をするプロジェクト等々、命と人権を守る戦いがスクリーンに展開する。監督は言う、「地球温暖化は《どうやって》生きるかの問題だが、水危機は《生きられるかどうか》の問題なのだ」と。生きられるかどうか、われわれが戦争の真ただ中にあることを本作ははげしく自覚させずにおかない。

ここ数年、「不都合な真実」や「いのちの食べ方」といった地球環境や食料問題を扱ったドキュメンタリー映画が話題になり、ロングラン上映されたことから分かるように、命と暮らしが地球規模で危機に晒されていることに皆が気づき始めているのは確かだ。ここ日本においても水面下ではすでに同様の事態、利権争いが繰り広げられているに違いない。コンビニなどで売られているミネラルウォーターは果たしてどのような国内産のミネラルウォーターは果たしてどのような製造され、どのようなルートでわれわれのもとに届いているのであろうか。

今、そして人類の未来に向けて、「一人ひとりが水の番人になる」ことが強く求められている。